

紫溟吟社句集：文苑

| | |
|-----|---|
| 著者 | 月兔，紅鱒，不割石，石瓢，?耳，對泉，巨足，岸三，戰車，渭南，十七公，李王，子明 |
| 雑誌名 | 龍南會雜誌 |
| 巻 | 1 1 8 |
| ページ | 4 2 - 4 4 |
| 発行年 | 1906 |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/5996 |

野の水の浮藻にうつる天の川浮藻ゆ〜夜はしづかなり
 秋の香の草の戸深く浸み入るか思ひ寝衣露ひやかに
 夢追いて野を淋とはぬ小兎や月の御座のごよみにさめぬ
 宵寒き四辻灯細の雨の夜や骸は抱きて戀語り行く
 高榮の美き日潮の華とあれて大洋に千歳の戀の譜とかむ
 みだれ心秋は戸をうつ風だにも冥府より誘ふ聲ときかる
 寐しければ泣かるればこそ人をこひめ秋はそとちる一葉もにがき
 たとへなば森にさびれし古宮の扉をうつ雨ときし流れや
 かたこととたくみが鑿の音はして夕べ雨ふる静けき秋よ
 尖塔に夕日榮ねたる野の寺や白きひな鳩皆かへり来る
 大空に千羽鳥たつ姿して夕日の岡の銀杏ふきさる
 谷々は三悪道か大紅蓮焰乱れて紅紅するかな

黛南

不割石

蘆笛

花髯郎
柴郎

紫溟吟社句集

三十九年十一月九日久本寺に於て月兎子送別を兼ね運座二回
 寫生五句。作者十六人選者十六人。月兎十五点。不割石十三点。

瓢郎十一點。綠耳。紅鱗九點。李王八點。對泉巨足七點。岸三
 渭南六點。十七公戰車五點。以下略。入選の句
 五點 寺門入れば銀杏大樹に秋の風 月兎

四点 末枯れて蔓に束ねし卒都姿哉

紅鱗

全 地境に高き雑木や烏瓜

不割石

全 壁に題す墨の匂ひや冬籠

石瓢

三点 よその寺の鐘も聞わて秋の暮

月兔

全 寫生すと人立ち去りて句座寒し

綠耳

全 後れ參ず人に火鉢の順送り

對泉

全 秋の石廣うして硯忘れあり

巨足

全 與書院維摩の像に靈芝哉

岸三

全 石に踞して冷たうなりぬ雲十句

戰車

二点 日暮るゝに尙鳴く鵲や寺林

月兔

一点 寺畑冬菜の少し青き哉

全人

月兔選

寫生すと人立ち散りて句座寒し

綠耳

暮の秋鐘もつかざる御寺哉

渭南

石に踞す夕日の庭や鵲來鳴く

十七公

屋根越しに椋の梢や秋の空

瓢郎

寐轉んで芝生冷たし秋の庭

巨足

後れ參ず人に火鉢の順送り

對泉

天

相隣る夫婦の墓や秋寒し

李王

題。冬砧。顔見世。作者選者前の通り。瓢郎十五点、綠耳十四点、月兔巨足十一点、紅鱗十点、戰車九点、子明不割石六点、以下畧。

七点 顔見世に行く灯落ち合ふや廣小路綠耳

五点 冬の砧盤にひゝある響き哉 瓢郎

四点 冬砧壁赤々と櫓を焚く 巨足

全 顔見世や一列ならぶつくり顔 戰車

全 顔見世のまだ木戸開かぬ群集哉 月兔

三点 冬砧吹水含む齒のつめた 瓢郎

全 顔見世の初夜をたし出す火事の後綠耳

全 顔見世や樂屋を覗く京童 瓢郎

全 思ひ寐や明日顔見世の芝居行き 月兔

二点 冬砧梯子にさげし灯哉 紅鱗

全 忌み事に秋暮れ冬の砧哉 子明

全 うちくゝて冬の砧の盤光る 戰車

全 顔見世や棧敷の隅に文左工門 月兔

一点 冬砧うちやむ門や霜の聲 全人

顔見世や知れる役者があいさつに全人

冬砧又雪なりと門に聲 全人

月兔子選

顔見世や一列ならぶつくり顔 戦車

顔見世や樂屋鏡のうすぐもり 巨足

顔見世や火事ありて人の騒ぎたつ子明

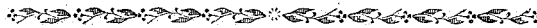
顔見世や中洲に月の落ちかゝる 李王

冬砧壁あか〜と櫓をたく 巨足

雨だれや顔見世をまつ木戸の口 不割石

天

顔見世や心ことなる女連れ 巨足



岩に碎けて、清く流るゝ水のけしきこそ、
時をもわかすめでたけれ。沉瀬日夜東に流
れ去る、愁人の爲にさゝまるこそ少時もせ
ず、さいへる詩を見侍りしこそ、あはれな
りしか。嵯康も山澤に遊びて、魚鳥を見れ
ば心樂むさいへり。人遠く水草清き所に、
さまよひありきたるばかり、心慰むこそは
あらじ。

(徒然草)